

グレート・ヒマラヤ・トラバース企画趣旨

日本は国土の 80%を山地が占める山岳立国である。この国で、人々は山と深くまたさまざまなに関わりながら生活をしてきた。神秘性の高い山は永らく信仰対象であったが、狩猟や採集を目的として人々は山に分け入り始めた。その後、人々は豊かな自然の中を楽しみを求めて山に登るようになった。

ヨーロッパアルプスにおいては、モンブランの初登頂に端を発しスポーツ登山が開幕したが、やがてヨーロッパを飛び出して、より高い目標を求めてヒマラヤへと向かった。20世紀初めには地上最高の山々—8000mを超える山々—への挑戦がはじまったが、1950年になって人類最初の8000m峰アンナプルナがフランス隊によって登られた。以後、1953年の世界最高峰エベレスト登頂をクライマックスとして、14座の巨峰は1964年までにすべて登られた。

日本では1936（昭和11）年、堀田弥一が率いる立教大学隊が、インドのナンダ・コート峰(6867m)に初登頂し、我が国初のヒマラヤ登山の扉を開いた。

日本山岳会においても、1956（昭和31）年のマナスル初登頂を嚆矢として、多くのヒマラヤの高峰に挑戦してきた。ヒマラヤ・ラッシュの時代にあっては一つの頂が登られても、それは登山の終焉を意味するものではなかった。ルートを変え、登り方を変え、季節を変え、登山家たちはすでに登られた頂に対しても挑戦すべき課題を見出してきた。70（昭和45）年マカルー南東稜初登攀、76（昭和51）年「日本山岳会創立70周年記念」のナンダ・デヴィ縦走、80（昭和55）年チョモランマ北壁登攀、84（昭和60）年「創立80周年記念」のカンチェンジュンガ縦走、88（昭和63）年チョモランマ・エベレスト交差縦走、92（平成4）ナムチャバルワ初登頂、95（平成7）年創立90周年マカルー東稜初登攀、96（平成8）年K2南南東リブよりの大量登頂、97（平成9）年K2西稜～上部西壁初登攀、98（平成10）年カンチェンジュンガ北西壁～北稜、2003（平成15）年ローツェ南壁、04（平成16）年パチュムナム・ギャンゾンカンの初登頂などである。

グレート・ヒマラヤ・トラバースは2025年に創立120周年を迎える日本山岳会のこれまでのヒマラヤ登山の足跡をカンチェンジュンガからK2までの5000kmを辿り、これからの新しいヒマラヤ登山を模索する「温故知新」の山旅である。

目的

- ① ヒマラヤ地域の変遷調査（初登頂時代との比較と環境変化）
- ② 探検的ヒマラヤ登山による未踏峰・未踏ルート登山（ヒマラヤ登山塾の実施）
- ③ 1枚の地図から、夢を描き・計画を作り・実行するチャレンジ精神を、5000kmにも及ぶ長大なヒマラヤ山脈横断という踏査を通じて次代に伝承する